

マスク皮膚炎

マスクの着用、手洗い、うがいが日常化してすでに2年以上経過しています。マスク着用に伴う皮膚のトラブルは湿疹、毛包炎、ほてりによる潮紅などがあり、今号では皮膚炎について解説します。

まずマスクには主に不織布、布、ウレタンという3つの種類があります。感染予防の効果が高い観点から不織布の着用が推奨されていますがホルムアルデヒドやチメロサルといったアレルギー物質が用いられていることがわかっています。また呼吸のしやすさ、蒸れにくく使用感が良い点からウレタンを好む方も多いですがやはり原料となるイソシアネートでアレルギー症状が報告されており万人に使えるわけではありません。

接触皮膚炎は一次刺激性とアレルギー性に大別され、前者は原因物質の皮膚刺激による限局的なかぶれ、後者はアレルギー反応が関与するため接触部位を超えて皮膚炎の範囲が拡大するものです。今のところ外来診療で診るのはほとんど一次刺激性の接触皮膚炎でマスクが当たっている鼻、頬、顎部に紅斑、かゆみ、つっぱり感、ヒリつき、フケといった症状を認めました。中でも一日8時間以上着用する方に多くみられ、オープンスペースなどで人との距離を保てる場所ではマスクを外すことも必要でしょう。もともとベースにアトピー性皮膚炎や脂漏性皮膚炎といった敏感肌の方がかぶれやすく、マスクの使い回しから皮脂、汗、ファンデーションなどが付着した状態で使い続けることは避けましょう。

また顔に見られる皮膚トラブルがすべてマスクによるものとは限りません。両頬から鼻の頭にかけて広がる蝶形紅斑(全身性エリテマトーデス)、口腔内乾燥を伴う環状の紅斑(シェーグレン症候群)、毛細血管拡張による紅斑(酒さ)など異なる疾患の可能性もあります。自己判断はせず治りが悪い発疹なら専門の皮膚科でご相談ください。